話題の講義ライブ
LIVE 2012

Today's Program いまヴァルター・ベンヤミンを読む I

TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

東京外国語大学

国際社会学部 国際社会学科

5.11.Fri. at Fuchu
14:20~15:50
岩崎 稔 教授

ベンヤミンが残した哲学思想で繰り広げる無限のおもしろさを秘めた〝思想のセッション〟

講義の流れ　学生によって論点整理・問題提起されたベンヤミンのテキストについて議論する。

醍醐味　近年もっとも刺激的で示唆的な思想家として注目されてきたヴァルター・ベンヤミンを取り上げ、新しい問題を発見したり、自分の疑問や意見を表現する技法・作法を身につける。

教科書にはない、自分だけの答を全員が求めて表現し合う場

このゼミの風景を一言で表すならば、それは〝思想のセッション〟ということに尽きる。セッションというのは、例えばジャズでいえばピアニストが思いつきでメロディーを弾き始めると、そこにドラマーがリズムをつくり、ベーシストが音の深みを加えてゆく、というようないわゆる即興音楽だ。それをベンヤミンの哲学思想を用いて行うのである。

よって単なる座学ではなく、全員が主役である。岩崎先生を囲み、20人ほどの学生が小さな教室で自らの思想を表現し合う。哲学のゼミでありながら、決して内向的なイメージではない。まず、挙手がほとんど行われないのだ。誰も手を挙げない代わりに、誰もが口々に語り出す。時には討論であり、そしてそれは一時も止むことはない。

哲学的な命題において、到達すべき答はそもそもテキストが用意してくれるものではない。答のないものに自分で答えること、そのプロセスがすべてである。このゼミでは、すべての学生が自らの答を出すために表現をし合っていく場なのだ。

一筋縄ではいかない難解なテキスト ベンヤミンの『翻訳者の課題』に挑む！

ゼミは最初に〝プロトコル〟と呼ばれる、前回の議論を要約した記録を担当の学生が持ち回りで発表する。次に、その回の担当者が予め指定されたテキストの論点整理と問題提起を行う。これも毎回違う学生が持ち回る。

今回は『翻訳者の課題』である。ベンヤミンによれば翻訳(者)の課題とは、予定されている純粋言語の種を成熟させること、結果として、それぞれの翻訳(者)の時代における、原作の「死後の生」を表示することだとされる。

この難解な論点整理に対し、岩崎教授は「翻訳者の課題というと文学的だけど、実はこれはテキストの文学理論ではなくて、すごく大きなものを隠している。それは歴史や現代世界をどう理解するかに及んでいる。正解を言うぞ、と意気込まなくていい。それよりも突拍子もないアナロジーでもおおいに結構。妄想をふくらましてほしい」と述べる。

すると「僕が思ったのはその突拍子もないアナロジーだと思うんですけど」とさっそく学生が話し始める。「例えば筆箱があります。これは円柱形をしたバッグ型の筆箱ですが、僕の正面にいる人にはこれが長方形に、横にいる人には円形に見えるだろう。純粋言語というのはいわばこうした視線を統合した、筆箱の形の総体みたいなものだと思う。そしてこの視線がそれぞれの言語なんじゃないかな」。メタファーをつかって思想を表現する手法だ。

それに続いて「これってやっぱりソシュールだよね」、「物理空間の認識と書物の思想は違うのではないか。思想はいる人の分だけ解釈が存在するものだ。純粋言語というのは、その存在を目指しながらも、最後のところで辿りつけない部分にこそ存在しているのではないか。空間内でのある物体よりも、我々にその全てはとらえられないと解釈するのがいいと思う」など示唆に富む反論も飛び出す。そしてこの温度は終了のチャイムが鳴るまで冷めることはない。

目指すのは浮世離れの哲学ではなく世界の中で自分を見つめる視点

「哲学と聞くと、ついつい浮世離れして自分の内側を見つめるような視線を想像しがちですが、私は現代の問題に対して、もっとポジティブに可能性を持って見つめる視線を持ってほしい、そんなことを思ってこのゼミに臨んでいます」と岩崎教授は話す。社会に出るということはもちろん、人はいつも自分と世界の戦いの中にあると言えるだろう。そのときに自分だけを見つめるのではなく、世界の中で自分を見つめる態度、それこそがこのゼミが目指しているところだという。

「あまりに世界と自分との戦いで自分を守る人ばかりだから、〝世界と自分の戦いになったときは、世界の側に味方せよ〟という気持ちで臨んでくれるといいなと思います。幸いにも、このゼミの学生はみんなそういう意識は持ってくれていると思います」。岩崎先生はそう締めくくった。

VOICES 学生の声 of University Students

山岡 美咲さん（左）
外国語学部 ドイツ語専攻3年
他の仲間や友達にはない、同じ興味や関心を持った人が集まっています。しかも、自分はちょっと詳しいかなと思っていても、ゼミに来るたびに、みんなが自分よりずっと上にいることに気づく。自分はまだまだ初心者だと思えるのがとても新鮮で、ここにいられるのが嬉しいです。

田中 大樹さん（右）
外国語学部 アラビア語専攻3年
このゼミの主眼はベンヤミンの研究なんですが、そのためのいろいろな方法・視点を学ぶことになります。それはいわゆる望遠鏡や顕微鏡のようなもので、自分が何か突き詰めたいことがでてきたときに、考えるための有用な道具になってくれる。そんな道具とたくさん出会える場です。

いわ さき みのる
岩崎 稔先生
早稲田大学第一文学部哲学科卒業(1982)、早稲田大学大学院政治学研究科（政治思想専攻）博士後期課程単位取得修了(1988)。1988-1989 日本学術振興会特別研究員PD、1988-1989 立正大学非常勤講師、1990～ 東京外国語大学外国語学部専任講師、1993 成蹊大学非常勤講師、1994～ 東京外国語大学外国語学部助教授、1995-1996 ケルン大学哲学部哲学科客員研究員、2005 ライプツィヒ大学日本学科客員教授（Nachkriegsjapan als Idee I,IIを担当）、2007～ 東京外国語大学外国語学部教授、2012～東京外国語大学国際社会学部長

東京外国語大学

資料の請求およびお問い合せ先
http://www.tufs.ac.jp/
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学 改編推進支援室
TEL:042-330-5841

［ 沿革・歴史 ］

1873年	東京外国語学校(官立)開設。5学科(英・仏・独・露・清語)を設置。
1911年	新たに5学科(蒙古語、暹羅語、馬来語、ヒンドスタニー語、タミル語)を設置し13学科となる韓語学科を朝鮮語学科に改称。
1916年	葡語学科を設置し、14学科となる。
1949年	12学科(英米、フランス、ドイツ、ロシヤ、イタリヤ、イスパニヤ、ポルトガル、中国、蒙古、インド、インドネシヤ、シャム)を設置。
1956年	専攻科の設置。修業年限1年。専攻課程「英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ロシヤ語、イスパニヤ語、ポルトガル語、中国語、蒙古語、ウルドゥ語、ヒンディー語、インドネシヤ語、シャム語」の13専攻。
1977年	朝鮮語学科を設置。大学院地域研究研究科修士課程を設置。
1999年	独立百周年(建学百二十六年)記念式典挙行、『東京外国語大学史』刊行。ドナルド・キーン氏(コロンビア大学名誉教授)に最初の名誉博士学位を授与。
2000年	府中新キャンパスに移転。
2012年	言語文化学部と国際社会学部の二学部体制に改編。

［ オープンキャンパス情報 ］

①7月28日（土）10:00～17:00
②11月23日（金・祝）11:00～16:00
（外語祭同時開催中11/21（水）～25（日））
①②全体説明会、個別相談会、体験授業など。
詳細は決定次第本学HPに掲載します。

資料請求は簡単！ 本紙に掲載した大学（私立大学のみ）の案内資料は、P36のハガキ、または東進のウェブサイトwww.toshin.comから請求できます。